

## 駅で兵隊さんを見送り、遺骨を迎えた

三品シゲ 鹿沼市

●かつて金の鉱山があった

私は子どものころ、古賀志山の北側、今市の手岡（ちょうか）に住んでいました。金鉱山（注1）が近くにあつて、川の水の色は赤茶けて濁っていました。だからその水を引いていた土地は長らく使えなかつたようです。鉱山で働く人たちの社宅もあつたらしく、私が知っているのはその跡でした。

その鉱山は掘りつくされたこともあつて廃坑になつていました。鉱山ですから、発破のための火薬を保管する火薬庫があつてもおかしくはないと思いますが、コンクリートでつくられた箱のようなものが山の中腹にありました。そのあたりは「ぐりこ」って呼んでいたけど、採掘した後の石ころなどを「ぐり」とか「ずり」とかよんでいて、そういう石ころが積まれているような場所の呼び名だつたようです。

●艦載機の爆撃を目撃

小学校1年生だつたと思います。終戦の少し前、米軍の艦載機が飛んできて、その鉱山の火薬庫を目掛けて爆撃したのを目撃しました。海上の航空母艦から飛んでくる2人しか乗れない小さ

い飛行機。私が立っていた場所から火薬庫まで直線距離にすると、1、2 雫くらいいしか離れていなかったかもしれない。ばあちゃんや女たちは防空壕に入ったけど、おじいちゃんや外に立って見ていたので、私も見たくて防空壕に入らず、一緒に見ました。バババーツと、何回か襲撃して、何も入っていないことがわかつたのか、旋回して行ってしまった。昼間のことで、そのとき1回だけ、20分くらいのことだつたと思います。

●B 29の飛来

B 29は何度か来ました。そういう時はサイレンが鳴つたり、火の見やぐらの半鐘が鳴りました。飛行機の来襲はラジオで放送が入ってくるのですが、それを聞いて村の人に知らせるために半鐘を鳴らしました。その当時、村には必ず火の見やぐらがあつて、火事を知らせるだけでなく、泥棒が入つても半鐘が鳴りました。村の仲間に危険を知らせたんです。

やはり終戦間際、昼間、学校にいるときB 29が来ました。低空飛行です。学校の子どもたちは山に逃げましたが、雑木山だから下から飛行機は丸見えだつた。飛行機からも私たちの様子はよく見えたでしょう。子どもたちが泣き泣き山に逃げ込んだが、何もしないで旋回して去っていきました。脅すというか、からかうというか、そういう

ことを1回だけ経験しました。

●歌つて兵隊さんを見送つた

徴兵されて軍隊に行く村の兵隊さんを文挾駅に見送りに行きました。配られた半紙に日の丸を描いて、竹の棒で持つところを作つた。自分で作つた日の丸をもつて、歌を歌つて、見送つたんです。

汽車に乗る兵隊さんを送り出した後、その駅でしばらく待っていると、今度はお骨が帰つてきた。亡くなつた兵隊のお母さんが、白い布で首から箱を下げてね。その箱が1つの時も、2つの時も、3つの時もありました。宇都宮の連隊で受け取つてきたのでしょうか。小学1年生では、何が起きているのか、状況はよくわかりませんでした。

●進駐軍（G.I.）のこと

終戦。「負けるわけがない」って周りの人は言つた。

終戦と同時に、進駐軍（注2）は文挾の小学校に来て教室4つを占領していました。体操の時間に並んで行進したら、軍隊みたいことをやるなと禁止させられました。学校の校庭に、兵士がバスケットボールをするためのゴールを作つたり、道路には進駐軍のための標識を作つたりしました。その頃は学校の子どもの数は全校で300人くらいだつたでしょうか。

進駐軍は子どもたちをいじめたりすることはありませんでした。それまでは、月曜日の朝になると、校長先生が白い手袋をはめて、奉安殿（注3）を開けて勅語を取り出し、「朕（ちん）…天皇が自分を呼ぶときの言葉思うに：」と天皇陛下が作った勅語を読んだ。その奉安殿が、進駐軍が入ってきた途端に壊された。

日光の金谷ホテルも進駐軍に占領されていて、保養所として使われていました。夏はプール、冬はスケート場。今でもそれが残ってますよ。

●その頃の国民の意識

手をやけどして指がくっついていた人は、これを切り離してでも、戦争に行けないことは恥ずかしいことだと言っていた。国中、そう言わせる雰囲気になっていた。

日参といって、のぼり旗を作っておいて、隣の家から隣の家へ回すのだけれど、毎日、祠とか神社とかに祈願をしてからでないと回せない。毎日、日参することを国が決めた。日本は神様がついてるから、神風が吹いて絶対負けないって言ったが、神様と言われれば、誰だっていやだとは言えませんが。

近所には、八紘部落（注4）とよんでいましたが、航空隊関係の家族が、30戸ぐらい住んでいました。八紘一字（はっこういちじう）から名付けた部落の

名です。終戦後数年でほとんどが東京に引き上げました。

●あの悲惨な日々から立ち上がった日本

ある人の話では、体格のいいのばかりを集めてシベリアに連れていったという。満鉄のシベリア鉄道を作る作業。どれだけ隠れて生のサツマイモ食ったか。なんでも食えるものは生でも食った。でも食べるものは少なく、栄養不足でみんな鳥目になっちゃうんですって。春になって生えてきたヨモギを食べて、それで鳥目が治ったっていう話を聞きました。

東南アジアに旅行に行ったら、私たち旅行者を見て「日本、憲兵隊」っていうんですよ。戦争時代、日本人が外地に行ってるんだことをしたか、現地の人はいまだに「日本、憲兵隊」と覚えてる。おそらく、いい思い出はなかったでしょう。

沖縄が陥落した時に戦争をやめれば、あれほどの空襲はなかったし、原爆はなかった。

しかし、昭和20年が終戦で、39年にはオリンピックやったんですからね、日本は。これはすごいことです。新幹線も39年に走った。わずか19年で復興したんです。

（二〇一六年8月にお話を伺ってまとめました）

注1…金鉱山

社員寮があるほどの大きな規模の鉱山だった。昭和17年に閉山。写真の後ろの方の人々は朝鮮人であったという。

写真の集合写真  
社員が山掛倉に見える  
遠景に



表で多量採取された金  
の表彰を受けた



注2…進駐軍（GHQ）

連合国軍最高司令官総司令部とは、太平洋戦争（大東亜戦争）終結に伴うポツダム宣言を執行するために、日本で占領政策を実施した連合国軍機関である。職員はアメリカ合衆国軍人とアメリカの民間人が多数で、他にイギリス軍人やオーストラリア軍人らで構成されていた。

極東委員会の下に位置し、最高責任者は連合国軍最高司令官（連合国最高司令官）。日本では、総司令部（General Headquarters）の頭字語であるGHQや進駐軍という通称が用いられた。支配ではなくポツダム宣言の執行が本来の役目である。（ウイキペディアより）

注3…奉安殿（ほうあんでん）

戦前の日本において、天皇と皇后の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物。

御真影・教育勅語を保管するために、小学校から大学まで、どんな学校にも必ず奉安庫または奉安殿がありました。最初は校長室に置かれた丈夫な金庫が奉安庫として使われましたが、昭和の始めころから、校庭に耐震・耐火構造の鉄筋コンクリートの頑丈な奉安殿が建てられました。生

徒たちは毎朝登校すると、まず奉安殿の前で最敬礼をしなければなりません。最敬礼を怠ると、先生から叱責され、体罰を受けることもありました。敗戦後のEPOの指導によりその多くは解体されたようです。

#### 注4 八紘部落

『終戦秘話 手岡の特攻隊宿舎始末記』と題された数枚の聴き取り記録が残っている（調査をした人物の名前は不明）。平成10年8月に丸山和彦氏からの聞き取りを記録したもので、一部抜粋します。

丸山氏は、太平洋戦争当時、陸軍航空隊清原航空補給所長だった丸山茂夫（陸軍大佐）の息子さんである。

戦局が悪化する中で、陸軍の特攻隊要員とその家族のために、旧落合村手岡に仮設住宅を建設することになり、若山少佐が率いる第三飛行隊が設営作業に従事した。この時、若山少佐の誘いによって丸山大佐も家族を引き連れて手岡に移住し、終戦後も昭和26年までとどまりすむことになったのだそうである。

若山少佐が率いる第三飛行隊の第一陣50名が手岡に派遣されてきたのは昭和20年5月の事だった。雑木林を切り開いて数十棟の住宅の建設が進むにつれて、第二次の特攻隊要員とその家族が入居し、最後の第三次要員とその家族が入居し終えたのは、昭和20年7月20日ごろで、軍人と家族を合わせると総数300名に達したという。

特攻隊要員と家族が住むにわか作りの家は、杉の木の丸太を掘立柱にし、麻がらと麦わらで屋根をふき、周囲を麻がらで囲っただけの物であった。その中に第三飛行隊の兵舎から持って来た畳を敷いて寝起きし、ドラム缶を風呂代わりにしていたとのことである。

少しでも食糧を自給できるようにするために、早速荒地を開墾して作物の栽培を始めたが、間もなく終戦になった。独身の特攻隊要員はそれぞれ復員して家族のもとに帰

り、戦災によって家を失った家族持ちの者はその後も仮設住宅に残って暮らさざるを得なかった。

特攻隊の宿舎は、現在は跡形もない。かつてそこに特攻隊の宿舎があったことも忘れ去られようとしている。

#### \* 八紘一宇

〔日本書紀「掩二八紘一而為レ宇」より〕

天下を一つの家のようにすること。第二次大戦中、大東亜共栄圏の建設を意味し、日本の海外侵略を正当化するスローガンとして用いられた。（大辞林より）

#### △追記▽ 今市秘匿飛行場建設のこと

今は故人となられた中野氏は私（筆者：終戦秘話執筆者）が今市小学校の教員だった当時のPTA会長さんで、陸軍士官学校の出身の旧軍人だったが、激動の時代を綴った体験記の中に、今市秘匿飛行場建設の事が記されていた。

中野さんが陸軍士官学校を卒業したのは昭和17年の事で、栃木県金丸原の第一六七飛行場大隊に配属され、さらに黒磯の埼玉飛行場分遣隊に転属し、昭和20年4月には移駐してきた茨城県鉾田飛行師団の特攻機が出撃するのを見送ったこともあるとのことだった。

その後中野さんは、埼玉飛行場文遣隊から今市飛行場分遣隊長となり、大室小学校に駐屯する分遣隊員を指揮して飛行場の整備作業に当たることになった。手記の中で中野氏は次のように述べている。

この飛行場の呼称は今市秘匿飛行場として本土決戦に備えての設定で、今市を距ること約8浬、針貝にある。

着任したころは設定隊により滑走路（幅約100㍎、長さ約200㍎）は完成しありしも、誘導路や飛行機の秘匿設備はその緒についたばかり、ましてやその他の施設においては皆無で、設定隊により作業は継続中であつた。

当時この飛行場には軽爆撃機1機、練習機3機が翼を

休めていたが訓練は実施せずにあつた。

とにかく戦局はいよいよ急を告げ、本土決戦は覚悟の内にあるゆえ、飛行場としての諸施設を急遽整えなければならず、多忙な日々の一歩を踏み出さねばならなかつた。

連日飛来する米軍機の攻撃によって壊滅的な状態にある我が国の航空戦力を少しでも温存し、来るべき本土決戦に備えて、残存する飛行機を各地に分散して隠し置くための飛行場、それが秘匿飛行場で、軍の設定隊ばかりか、今市町、大沢村、落合村、豊岡村、篠井村、そして富屋村からも勤労奉仕隊が出向いて過酷な作業に従事させられた。しかし、飛行場の完成をみることなくして終戦となり、飛行場跡地は開拓農場として今に至っている。

注1、4については荒巻實氏（日光市）にご協力をいただきました。